

2007/06/14 看護情報学授業ディスカッション記録

発表者：印東桂子さん「情報リテラシー教育への看護職者のかかわり」

ディスカッション内容：看護職は情報リテラシー教育にどのように関わられるだろうか。

(例えば・・・養護教諭の立場だったときに、サイトの中身をどうやったら判断できるか、どう健康に近づくかと、考えていってはいっは??)

- 自分が勤めていた病院に珍しい疾患の患者さんが日本に手術を求めてきた。(情報リソースはネットだった。)手術を求めた患者さんに、「症例が少ないから」と、断るわけにもいかない。→自分で情報検索行動を終えて、情報の評価をするだけの人に対して意見をすることは看護職としては難しい。
- 選択したことに対して、何らかの示唆をどこまで与えられるか。
- 決定して最後の情報まで得た人に対して、相手の自己効力感を維持し続けるようにケアすることは大事。
- 三輪真木子著「情報検索のスキル」はおススメ (今回のプレゼン参考文献)
- 看護職者として相手に接しているときは、意思決定の途中にある人が多い。患者さんのもっとも身近にいる存在である看護職が、市民に対してよりよい「情報検索行動」を示すためにプロセスモデルは利用できると思う。
- 海外の情報検索モデルはあるが、日本ではまだ多くないのではないかな。
- 看護職者として、情報探索モデルを作るというのもひとつ、できることなのでは。
- 自分が受けてきた教育から：オーラルコミュニケーションの授業、自分の興味のある土地についてネットで調べてプレゼン→このような情報探索の授業を受けたのは初めてだった。情報探索自体は日々行っていることだが、それを授業に盛り込むところが新鮮。→このように学校での授業内に、情報探索行動をしながらリテラシーに働きかけることは可能なのでは。
- 健康問題に関しては何か問題が生じたときに行動を起こすものだが、問題の定義と一緒にコンサルテーションすることは看護職者には可能かも。
- 健康相談に来て、第一段階をはっきりさせることは看護職が行えるのではないかな。
- オタワ意思決定ガイド：これはコミュニケーションツール
- その前の段階にある人に対するケア→「気がかりは何ですか。」言語化できるようにサポートする。形にするプロセスを相互作用的に明らかにする。
- 病院に来る人は自分の病院は明確か？
- 患者さんは非常にネットで勉強している。でも、治療選択に関しては「先生に選んでほしい」という人は多い。

- ガイドで意思決定できるだろうか。：オタワのガイドはコミュニケーションツールなので、一人で行いたい人は一人で行うが基本的には「対話の中で利用するツール」
- タイミングを見てガイドや対面で意思決定できるといい。選択肢が多ければいい。
- 小学生が低学年からコンピューターを使っているので、検索しながらの授業も可能かも。
- 情報リテラシーに関しては中・高か？情報が正しいのかどうか。
- 4-6年生を対象とした「調べ学習」の例
- 出てきた情報が「誰の」「いつの」「どんな」情報なのかというのを判断できるか？
- 子供向けのポータルサイトを利用してその範囲で行うというのはどうか？メディアリテラシーの観点から考える★来週の梅沢さんへ続く
- 意思決定ガイドはコミュニケーションツール→その前の問題を明らかにするプロセスをはっきりさせることの研究は進んでいるのか？
- どうやって決めたかを記録に残しておく必要がある。
- 問題が明らかになるプロセスも記録に残す必要がある。
- そのような手順を残していくと、ある程度専門性を持つ。トラブルが少なく、問題がスムーズに明確になるような手順とは？（問題の明確化のための有効なアプローチ）：
- 相談の機能「そこで問題を明確にし→意思決定につなげる」
- 「相談って何？」→ただ引き出すだけではなく、道筋をつけるアプローチとは??
- テキストマイニングの話→「あの、すみません」「←☆☆と対応する」と良好な結果を招く、など。
- 膨大なテキストの中からさまざまな発見がなされている。
- 静岡県立がんセンターのサイト
- 消費者中心のデータ蓄積、データ解析の可能性（図書館情報学の分野でも行われている。）